



読売俳壇

矢島 渚男 選

海峽に潮目幾筋鷹渡る

【評】サシバや鷹の群が海を渡って南へ帰って行く。その海峽には幾筋かの潮目が見えるという大きな景観を立体的にとらえて見事である。この百舌鳥の管轄内に棲む私

【評】モズは自分のテリトリーを守って生きる鳥。毎日そこを巡回して鋭い声で啼く。それを管轄内という自分流に言い換えたのが面白い。やっと出た尺八の音山眠る

【評】尺八はリコーダーなどと違って最初の音が出るまでに苦心する楽器だ。「やっと出た」が素直な感想だろう。静かに山が眠っている中という設定もいい。

舞ふ巫女の紅葉かざしつ那智の滝
岩出市 西岡さちよ
歯の抜けてはにかむ笑顔七五三
仙台市 本嶋 健
初雪といふ優しさを待ち望む
羽村市 竹田 元子

天高く飛行機で行くあなたの地
東京都 関根ともみ
安住の地のごと落葉吹き溜まる
葛城市 二上 三六
背丈ほど掘って自然警見事なり
青梅市 津布久信雄

新松子小石があまた乗る鳥居
松山市 高山 洋子

宇多喜代子 選

秋晴や魚の影もくつきりと

【評】「秋澄む」「水澄む」という言葉が思い出される。「影も」であるから、まず魚そのものがくつきりと見えるのだ。秋ならではの句。切る葱を飛び出す葱の白さかな

【評】俎板のうえの新鮮な葱。包丁の刃を入れると白い葱が飛び出すように出てくる。「飛び出す」が生きて生きている。その匂いまでがあたりで漂う。

【評】はやりの少年サッカー。コートに広く散らばり、各々の位置にく。冬日があたたかく児童らにふりそそぐ。

日曜の青空市場温き夕
埼玉県 竹本 遊児
里神楽祖父のあぐらの一夜かな
津市 中山 道春
記録札付け放す鳥冬の雲
海老名市 山田 山人

一心にもの食う猫背文化の日
茨城 深谷 紀夫
明日も又積もるであらう落葉掃く
奈良県 池田美砂子
立冬の日射しを弾く散歩かな
秋田市 岡部いさむ

プリンター音の乾きも今朝の冬
和歌山市 針谷 国光

正木ゆう子 選

パレードの名残の銀糸冬に入る

【評】何のパレードだろう。衣装から落ちたのか、銀の糸が道に。銀色からは他の華やかな色彩も思われて、楽隊の音まで残っている。並木も初冬らしく色づいているか。本当にしるる時雨忌となれり

【評】芭蕉の忌日「時雨忌」は陰曆十月十二日。陽曆では十一月の時雨の多い頃である。享年は五十歳。今ならば、早すぎるという年齢だ。大根焚「さむおすなあ」と行列へ

【評】大根焚とは、煮た大根をふるまう京都の寺の行事。大根が美味しい季節になった。輪切りに皮を剥き面取して、煮る時間も幸せな大根。寒いねともう一振りの唐辛子

退院の夫の挽ぐまで置く蜜柑
周南市 原田 英夫
山道を登れば滑る朴落葉
川越市 大野宥之介
木枯しの行方は知らず大都会
越谷市 安居院半樹

小春日や歌ひ出しそな古墳群
宮崎市 藤田 長汀
熊の分少し残して山下的
松戸市 倉林 高次
分け入らば暖かさうな枯野かな
東京都 中島 徒雁

小澤 實 選

風邪ひきかけのぞわぞわをねじ伏せる

【評】風邪のひきはじめの悪寒をなんとかおさえこんだ。熱燻で風邪薬を流し込んで、さっさと早寝をしてというところだろう。うまくおさえこんで、仕事に支障はなさそうだ。小春日は饅頭日和温泉街

【評】小春日に温泉街を訪ねると、ところどころで温泉饅頭をふかす湯気が上がっている。小春日に重ねての造語「饅頭日和」が、効果的だ。父と子のタイ交換小春空

【評】父と子が力をあわせて、冬用タイヤに交換している。この小春がどんなに貴重か。江別市という地名もスパイスとしてはたらいっている。銃声が二発猟犬突進す

クレヨンの家族の顔や冬つらら
倉敷市 中路 修平
漱石の口髭豊か冬ぬくし
湖南市 滝井 正之

横綱の張り手のやつに冬来たり
甲府市 村田 一広
葱ひきてせわしく埋ける日暮かな
川口市 高橋まこお
凧や屋台の椅子の引けば鳴る
日立市 菊池 三夫

くずる子を肩車して西の市
横濱市 岡 一夏
東京都 岩崎 美範

枝しおり折

森澤程著『和田悟朗の百句』 物理化学者の顔も持った俳人、和田悟朗(1923~2015年)が詠んだ100句を紹介する。身近な自然から宇宙が広がる。八蛇の眼に草の感星昏ればはじむ

現代短歌文庫『さいとうなおこ歌集』 「未来」選者を務める歌人の自選歌、歌論、エッセーなどを収める。日常の寂しさ、インドの旅、母の看取りなどを題材に、現実から解き放たれる自由さを歌に追い求める。へぐらやみにたがいのことは垂れ下がり左右ことなる耳持つわれら

「読売俳壇」選者の宇多喜代子さんの選句は12月で終了します。来年1月の紙面から、新たに高野ムツオさんが担当します。宇多さん宛ての投稿は11月末で締め切り、現在高野さんへの投稿を受けつけ中です。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭